古典文法トレーニング　長文課題　品詞分解と現代語訳

大問十（出典：『平家物語』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。）

明くる二十八日より（カ下二・体／格助）、「重病を（格助）受けたまへり（カ下二・用／尊（入々→清）／完了・終）」とて（格助）、京中・六波羅、「すは（感動）、しつることを（サ変・用／完了・体／間投／格助）」とぞささやき（格助／係助／カ四・用）ける（過去・体）。入道相国、病つきたまひし（カ四・用／尊（作→清）／過去・体）日より（副助）して、水をだに（副助／類推）喉へも（格助／係助／ラ下二・用／尊（作→清）／打消・終）入れたまはず。身の（格助／（体修））内の（格助／（主格））熱きこと（ク・体）火をたく（カ四・体／格助／（体修））がごとし（比況・終）。臥したまへる（サ四・用／尊（作→清）／存続・体）所四五間が内へ（ラ四・体／係助）入る者は、熱さ堪へがたし（ハ下二・用／ク・終）。ただのたまふこととては（副／尊（作→清）／係助）、「あたあた（感動）」とばかり（副助／断定・終）なり（※1）。少しもただごととは（副／係助／ヤ下二・未打消／用／過去・終）見えざりけり。比叡山より（格助）千手井（せんじゅゐ）の水を（マ四・用／サ四・用）汲み下し、石の（格助／ハ下二・用／接助）船に湛へて、それに降りて（ラ四・用／格助）冷えたまへ（ヤ下二・用／尊（作→清）／接助（偶然））ば、水おびただしく（シク・用）沸き上がつて（カ四・用／ラ四・用／促音便）、ほどなく（ク・用）湯にぞなりにける（格助／係助／ラ四・用／完了・用／過去・体）。「もしや（副）助かりたまふ（ラ四・用／尊（従者→清））」と、筧（かけひ）の水を（格助）引（カ下二・用／存続・体）せたれ（サ下二・用／完了・已／接助（偶然））ば、石や鉄などの（間投（くろがね）／副助／格助）焼けたるやうに、水ほとばしつて（ラ四・用／促音便）寄りつかず（ラ四・用／カ四・未打消・終）。おのづから（副）当たる水は、ほむらとな（ラ四・体／係助）つて（ラ四・用／促音便）燃えけれ（ヤ下二・用／過去・已／接助（順確））ば、黒煙殿中に満ち満ちて（格助／タ四・用／タ四・用／カ四・用／イ音便）、炎渦巻いて上がりけり（ラ四・用／過去・終）。

※1：断定「なり」は体言ないし連体形と接続する助動詞だが、これは副助詞「ばかり」を含む、一部の助詞や副詞ともつながる。体言的に用いているか否かが基準となる。

◎現代語訳（→『ステップノート３０　古典文法トレーニング』参照）